



慶應義塾大学ビジネス・スクール

耳から脳が溶け出していると訴える公務員

主訴：仕事をしていると、脳が溶け始め、溶けた脳みそが耳からあふれ出して止まらない感覚に襲われる。職場を離れる少し良くなるが、職場や仕事のことを考えるとまた脳が 10 溶け出す感覚になる。「こんな話をしても、脳みそが耳から垂れている。先生、私の耳から緑色の脳みそが垂れているのが見えませんか」と、しきりに耳を拭く。

現在の仕事：38歳の女性で独身。さる県の「行政モニター」に関する職場の主任（係長待遇）。職場は、市民の声を行政に反映させる窓口の役割を果たしている。仕事自体は県庁に入ったとき以来したかった仕事であるので、単調な側面はあるものの意義を感じて面白い。 15

仕事の内容は、県民から直接寄せられる県行政に対する意見や要望（主に手紙で寄せられる）をまとめて関係部局に知らせたり、知事や議会関係者に提出したりする。また、予めお願いしてある「県政モニター」からの意見をまとめたり、独自に県行政に対するアンケ 20 ート調査を行ってその報告書を書く仕事である。

これまでのキャリア：父親は公務員、母親は専業主婦の家庭の長女（ひとり娘）として育つ。地元の公立の中学校、高校を出て、地元の国立大学の法学部へ。中学、高校時代は、「賢い子」「素直な子」「しっかりした子」として近所でも評判の優秀児で通した。 25

学生時代は司法試験を目指していたが、4年生の時、「力試しで」国家公務員の上級職と県庁の職員を受験したらどちらも「合格してしまった」。中央官庁で働くことも考えたが、地元に残って欲しいという両親の希望もあって、県庁に勤めることになった。県庁に勤務し、半年前から現在の職場に勤務している。

学生時代には、行政や企業の不祥事が大きな問題となり、いつも義憤を感じていた。弁護士か検事になって世の中の不正を正す仕事に就きたいといつも思っていた。クラブは、グッドサマリタン・クラブに所属し、日本にやってきている外国人のお世話をボランティア 30

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。